地域と学校　その18

各地の地域と学校

小松 尚（名古屋大学大学院環境学研究科准教授）

日本の各地で、少子化による学校統合や小中一貫の教育プログラム、幼稚園や保育園、児童館、福祉施設などとの複合化など、教育施設としてだけでなく、新たな地域施設として計画された学校が誕生しています。共通して、地域の住民が計画やその後の運営に参加しています。私も石榑（いしぐれ）小学校の計画に関わるようになったのをきっかけに、それまで以上に各地の学校見学に出かけるようになりました。行った先々での地域と学校の奮闘振りを、石榑のそれと重ねて思案することも。

今回は、そうして訪ね歩いた各地の学校の中から、私にとって印象深い4校を紹介します。

福岡市立博多小学校

福岡市の都心に立つ小学校です。都心の少子化により4校の統合という形で1998年に開校しました。敷地の3辺が道路に面しており、その敷地をぐるりと囲む形で小学校と幼稚園、児童館が並びます。小学校というより、複合教育施設といった趣です。

小学校は5階建て。1階に管理部門が入り、2階から上に教室が並んでいます。各学年のゾーンに教師コーナーがあり、先生方はそこから教室へ出向きます。逆にいわゆる職員室は会議スペースなどくらいしかなく、先生は常に子どもたちの傍にいます。

体育館も道路に面していますが、特徴的なのは、体育館の床が地下1階レベルにあること。体育館の高さを抑えられるだけでなく、歩道からは見下ろす形になり、大きな開口部を通して中の様子が歩道からよく見えます。また、「表現の舞台」と名づけられた階段状の部屋が、これも道路に面して作られており、発表会や地域の伝統や文化を学ぶ場所として活用されています。

体育館は毎日夜10時まで地域住民に開放されていますが、地域利用という点では、地域住民による図書館運営も注目です。「地域図書館」として、小学校の図書室の一角を利用して、学区のボランティアによって運営されています。開館時間は土曜日の13～17時と日曜日の10～15時まで。地域の方々による絵本の読み聞かせや季節ごとのイベントが行われています。

さらに、博多祇園山笠には学校として参加し、博多っ子としてのアイデンティティを育んでいたり、4校の統合ということもあり、4校の思い出の品々を展示するスペースが用意されているなど、地域と学校の歴史の継承に取り組んでいました。

福岡市立博多小学校
街路に向かってオープンな「表現の舞台」。まちに向かって演じます。

富山市立芝園小学校・芝園中学校

この学校も4つの小学校が統合され、既存の中学校とともにPFI事業として新築された小中学校一体型校舎です。富山市の都心に位置し、比較的高層の建物群の背景には立山連峰を臨みます。敷地の東側には立派なケヤキ並木の街路、南側には高校と、都心部ですが落ち着いた環境にあります。

この学校と博多小学校は設計者が同じだったせいか、同じように体育館の床は地下1階レベルにあり、その上部にプール兼多目的スペースを載せています。体育館の様子は、正門から校舎中央を貫く「パサージュ」と呼ばれる半屋外空間から見下ろすようになっていて、視線のやり取りが楽しそうです。

小学校はこのパサージュの南側です。屋根の架かったパサージュ側にもベランダが設けられ、暑い夏や冬季には子どもたちにとってよい居場所になりそうです。

パサージュを進んだ先には中学校。アトリウムを中心に南に普通教室、北に特別教室が並びます。特別教室では廊下との間仕切壁が展示棚になっていて、実験器具などが並び、教科の雰囲気や授業の様子が伝わってきます。

小中学校の普通教室が入る棟は柔らかく湾曲した平面形になっています。オープンスペース部分に変化が生まれ、学校特有の単調さを上手く解消しています。

市としては、都心居住を進める施策の一貫であったとのこと。また、学校選択制を導入しているので、この中学校にも隣の学区からの通学者がいるとのことでした。

富山市立芝園小学校・中学校
正門から中学校へと向かう途中の半屋外空間「パサージュ」。

小谷村立小谷小学校

次は山村の小学校。長野県の白馬からさらに北に入った谷筋の村に、3校の統合によって生まれた学校です。古道「塩の道」や諏訪神社に隣接した、村としては一等地に計画されました。村の象徴的な場所で、自立した村づくりの一環として新たな学校づくりが進んでいます。

ここは3メートルの積雪に覆われる雪深い地域ですので、雪対策が重要であり、同時に冬季の子どもたちの生活を如何に考えるかが設計上の課題となります。その解答として、まず積雪を落として除雪するために、勾配屋根がかかった分棟形式となっています。また、積雪に耐えるために鉄骨の方杖が屋根架構を支えています。重たい印象にならないように配慮されており、体育館ではむしろダイナミックさを醸し出していました。

棟の間は除雪のために除雪車が通ります。よって、棟間隔や渡り廊下のクリアランスが除雪車を基準に確保されたため、昇降口や図書室が入る中央棟が通常の階高よりも高くなっています。それを克服するために、昇降口から図書室に上がる途中に中2階の図書ホールが設けられています。登校した子どもたちはこの図書室を通り、教室へと向かいます。

子どもたちの生活は基本的に2階で行われます。オープンスペースを中心にした教室やクワイエットルーム、教師ラウンジ、デン（隠れ家のような小スペース）などのまとまりは、トップライトから降り注ぐ柔らかな光もあいまって、心地よいスケール感を生み出しています。毎日の給食の時間にはランチルームに180人全員が集合して、一緒に食事をします。学校の一体感を確かめる時間になっています。

少し残念に感じたのは、校舎周りの外構がアスファルト中心の舗装で覆われている点でした。除雪車による作業のためなのですが、雪のない時期に子どもたちが外で過ごすためのよい方法はないものかと感じました。

この学校は、地域コミュニティの拠点としても計画されており、既に多目的ホールや子育て支援ルームなどが多くの住民によって利用されているとのこと。石榑小との親近感やヒントを感じました。

小谷村立小谷小学校
中二階に設けられた図書コーナー。登校した子どもたちを迎えます。

積丹町立余別小学校

北に飛んで、北海道は積丹半島の先端にある学校です。小樽から車で約2時間。さすがに遠くまで来たと感じさせるまちでした。

かつてはニシン漁で栄えたまちも、いまでは過疎化に歯止めが利かず、中学校は既に統合されており、小学校も統合化という時に、まちの方々の熱意で学校を残したという経緯がありました。とはいえ、私が訪れた5年前でも全校生徒20名足らず。今年はさらに減って10名を切ったとのこと。2つの学年が一緒のクラスで同時に学習を行う複式学級が行われています。昼食はもちろん先生、子どもたち一緒にとるのですが、まさに家庭のダイニングルームの雰囲気でした。

ここでは、学校を建て替える際に、学校だけでなく、まちの歴史や文化を伝える「まちの道」や以前の体育館を転用した「生活館」（コミュニティセンター）、さらには診療所も計画されています（現在のところ未着手）。また、エコミュージアムの拠点としても位置づけられ、学校周辺の植生や動物たちをウォッチングしたり学習するために自然工法による整備がされました。

この計画を指導した大学研究室は約20年間、このまちの活動や計画に参画してきました。その成果のひとつがこの学校の建て替えでした。また、毎年夏のお祭りや運動会には学生さんが参加し、また、「まちの道」の運営や広報にも協力しているとのこと。建築の計画に参画するだけでなく、まちの一員として継続的に参画する意義を学びました。

積丹町立余別小学校
まちの歴史を伝える「まちの道」。ここで学校と生活館が結ばれます。

まちづくりと学校づくりの連携

4つの学校を通して、それぞれの地域で、地域と学校がこれからのあり方を模索し、行動していることがわかります。その地の特色を活かした地域と学校の連携によるまちづくりと学校づくりが、日本各地で進んでいることでしょう。今回紹介した4校は新しい校舎を建設していますが、必ずしも校舎の建て替えを伴うケースばかりではありません。つまり、学校建築の影響力は大きいですが、それだけで地域と学校のあらたな関係や取り組みが生み出される訳ではありません。大河ドラマのような長年の取り組みの一つとして新しい校舎が生まれ、またそこから次の取り組みがゆっくりと始まっていくのでしょう。

4校を訪れながら、まちづくりと学校づくりを一緒にとらえる大事な視点に気づきました。